

ファシリテーターの可能性 - 子ども参加の立場から -

福祉社会開発研究センタープロジェクト2
次世代育成支援グループ
東洋大学ライフデザイン学部 生活支援学科
実習指導助手 若林ちひろ

はじめに

1994年に日本で採択された子どもの権利条約に、「子どもの参加の権利」が明記されて以降、子どもが、自らが関わる事象に対して自らの意見を述べ参加するという流れが広がってきている。条約制定以前、子どもにとって最善の利益と思われていることは、主として「おとな」が決定してきた。日本においては、古くから子ども会活動や生徒会などの場面で参加をする機会が見られたが、それは限られたものの場合が多かった。また、おとなが決定した子どもの最善の利益は、果たしてそれが本当に子どもの最善の利益であるのかという疑問に起ち、自らの事象に関しては自らが決定できるようその権利が明文化された。

子どもの権利条約

子どもの権利条約は、1959年に採択された「児童の権利に関する宣言」(総会決議1386(XIV))の30周年に合わせ、1989年11月20日に国連総会で採択された国際条約である。1990年9月2日に発効し、日本国内では1994年5月22日から効力が発生した。

子どもの権利条約により、子どもは保護される存在から権利を行使する主体へと変化した。その中で、子どもの参加の権利を構成する主な条文としては次のものがあげられる。

- 第5条：親の指導の尊重
- 第9条：親からの分離禁止と分離のための手続き
- 第12条：子どもの意見の尊重
- 第13条：表現・情報の自由
- 第14条：思想・良心・宗教の自由
- 第15条：結社・集会の自由

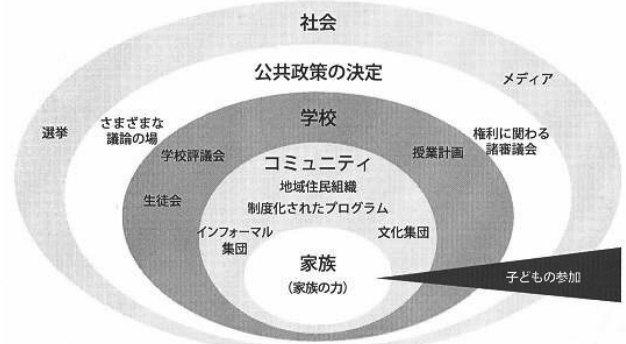
- 第16条：プライバシー・通信・名誉の保護
- 第17条：マスメディアへのアクセス
- 第21条：養子縁組
- 第23条：障害児の権利
- 第29条：教育の目的
- 第31条：休息、余暇・遊び、文化的・芸術的生活への参加

このように多くの条文の中に子ども参加のベースとなるものがうたわれている。様々な場面・機会において、子どもたちは参加するという権利が認められている。

子ども参加の必要性

子どもの参加とは何か。「参加」というと、多義的であり、その定義は広義である。大辞泉では、「ある目的をもつ集まりに一員として加わり、行動をとることに」と定義されている。

子どもが成長発達するにつれ、その参加の機会は私的な空間から公的な空間へ、影響力の地域的な行使から世界的な行使へと拡大していく。



サルバドル(ブラジル・バイア州)で開かれたユニセフ「グローバル・ライフスキル・ワークショップ」(2002年6月)で発表された、R・ニミ作によるパワーポイントの図を修正。

図1 子ども参加

子どもの参加における実践的な参加とは、おとなが子どもたちに耳を傾けるということ、と世界子供白書では定義されている。子どもが自分の関わる事象に関して、自分の気持ちを述べることができる、それが何らかの形で反映することが参加であるといえる。

ではなぜ、子どもが活動に参加することが必要なのか。ユニセフは「世界子供白書2003 The State of the World's Children 2003 - CHILD PARTICIPATION」においてその理由を以下のように述べている。

- ・意味のある、質の高い子どもと青少年の参加を促進することは、彼らの成長発達を確保するうえで必要不可欠だからである。(中略) 自信と建設的な自己主張と、家庭、学校、コミュニティ、国における民主的な対話・実践に貢献する力を備えて、思春期に移行していくこともできるはずである。
- ・子どもたちは、参加する機会があれば自分たちのまわりの世界を変えられることを証明してきたからである。子どもたちは、おとなの理解を豊かにし、おとなの行動に前向きな貢献をできるようなアイデア、経験、洞察力を揃えている。
- ・世界の指導者たちは、国連子ども特別総会(2002年5月)において、子どもたちのためにというだけでなく、子どもたちとともに世界を変えていくという決意を宣言したからである。
- ・民主主義の構築は、国際的な平和と発展によってきわめて重要な問題だからである。すべての人の権利と尊厳の尊重、すべての人の多様性の尊重、自分に影響を及ぼす決定に参加する権利の尊重といった民主主義の諸価値は、子どものときに初めて、そしてもっともよい形で身につけられる。
- ・もはや参加に関心を向ける以外の選択肢はないからである。参加したいという意欲は、すべての人間に生まれながらに備わっている。

以上のように参加の重要性をあげ、子どもが参加することはもはや「当たり前」のことであり、今後重要となってくるのは、子どもが参加するかどうかではなく、どのように参加するかという問題であるとしている。

また、子ども参加の必要性について、林大介はSWOT分析(S = Strength強さ、メリット、W = Weakness、弱

さ、限界、O = Opportunity、機会、可能性、T = Threat、危険性、デメリット)を行い、次の表を提示している。

子ども	メリット	限 界	おとな
	<ul style="list-style-type: none"> ・個性豊か→自己実現 ・主体性 ・興味が高まる ・楽しめる ・相手を知る ・子どもなりの責任感 ・達成感・自主性 ・自信がつく、自分を知る ・アイデアを出す楽しさ ・子どもが気づく ・自分でやる ・受け身ではなくなる ・2度目、3度目と広がる ・自分の意見を言える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加の平等性 ・自発的な参加 ・子どものやりたいことが実現できる? ・自己中心 ・ネットワークの限界 ・大人の手助けが必要 ・ルールを作れない ・暴走 ・お金、モノ ・異なる意見の対応 	
社会	可 能 性	危険性・デメリット	子ども
	<ul style="list-style-type: none"> ・新しいヒント ・リーダーを育てる ・よりよい社会 ・おとなが子どもを知る。 ・政策に反映 ・制限や枠にはまらない ・おとなになるプロセス ・“子どもの限界”を考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・まとまりがつかない ・おとなと子どものバランス ・不参加のことも ・方向性が定まらない ・全部実現できない ・おとなに管理される ・自分のことだけ主張 ・予測できない事故 	

「子どもにきく」「子どもの意見を尊重する」ためには、子ども側から意見をだしてもらうことが重要な言うまでもない。しかし、子どもの意見はおとなには届きにくいのが現状である。

子どもにとっての最善の利益のためには、それを子ども自身に聴くことが大切であり、加えて子ども自身が声をあげていくためにおとなが支援して行くこと、子ども自身がエンパワーされることが求められている。子どもの参加を支援する「おとな」、その役割を担う「おとな」として注目されているのが、ファシリテーターである。近年ファシリテーターということは広く知られるようになり、その役割は多分野広範囲に及んでいる。その中でも本論では、子ども参加を促すファシリテーターの役割について述べたい。

ファシリテーター

「参加」することの大切さ、必要性については上記のような点があげられているが、その参加のために様々なアプローチ方法を用いて、促していく役割を担っているのが「ファシリテーター」と呼ばれている。ファシリテーターの活動範囲は多岐に渡り、その役割や定義は様々である。

本来、ファシリテーション (facilitation) とは、「促進する」「容易にする」「円滑にする」「スムーズに運ばせる」というのが原意である。人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶように舵取りするの

がファシリテーションである。企業内や学校内、地域のコミュニティなど、組織での会議の場などで、発言を促したり、話の流れを整理したり、参加者の認識の一致を確認したりする行為で介入し 相互理解を促進し、合意形成へ導き組織を活性化（協働を促進）させる手法・技術・行為の総称をいう。コミュニケーションスキル以外にも、プロセスデザインとしてグランドルールが必要な場合の設定内容の検討、ミーティング自体の進め方なども含み、さらに会議の場所や参加者の選択、日程のデザインなど、オーガナイザーの役割を含む場合もある。会議の場に限定せずとも、日常での組織コミュニケーション全般において、ファシリテーション技術は活用することができる。また、会議の場などで、コンテンツ（議論の内容）に対して中立な立場にたち、話し合いのプロセス（流れ）に介入してファシリテーションを行う者のことをファシリテーターという。

このようにファシリテーターは、その対象者を選ばず、様々な場面で活動している。子ども参加を支援するおとなのことも「ファシリテーター」という。ユニセフは、子ども参加を促進して行くためには、おとなが「新しい力」を身につけなければならない、と言う。（『ユニセフ世界子供白書2003』p.2）、「新しい力」に関して、子ども参加の国際的な研究者であるロジャー・ハートは次のように述べている。

「ファシリテーターは、皆がどの考えも受け入れられると思っていることを確かめ、考えがどんなにとっぴに見えても批判めいたことを言うてはならないことをときどきグループのメンバーに思い出させなければならない。ほかの人の考えのうえにさらに考えをつけ足してもよいと再確認することも大事である」

「子どもの参画を助けるファシリテーターが備えているべき資質は、教師や子どもとともに活動するための訓練を受けてきた人の多くが従来もっている資質と同じものでないことは明かである。ファシリテーターは、知識を伝える人として働くのではなく、子どもが自分たちで活動できるよう舞台を整え、そのことによって子どもたちを助ける人である。これはファシリテーターが自分の知識や技術を隠すべきであるという意味ではない。子どもたちが自分自身で問題を発見し、その答えを見つけ出すようにするためにこそ、ファシリテーターは知識や技術を使うべきなのである。」

このように、子どもの参加を促すためにもファシリテーターの役割を担うおとなの存在は求められている。

ファシリテーターに求められているスキルとして、日本ファシリテーション協会は以下の4点をあげている。

場のデザインのスキル ~場をつくり、つなげる~

何を目的にして、誰を集めて、どういうやり方で議論していくのか、相互作用がおこる場づくりからファシリテーションは始まる。単に人が集まればチームになるのではない。目標の共有から、協働意欲の醸成まで、チームづくりの成否がその後の活動を左右する。中でも大切なのが活動のプロセス設計である。問題解決プロセスをはじめ、基本となるパターンをベースに、活動の目的とチームの状態に応じて一つひとつ段取りを組み立てていかなければならない。

対人関係のスキル ~受け止め、引き出す~

活動がスタートすれば、自由に思いを語り合い、あらゆる仮説を引き出しながら、チーム意識と相互理解を深めていく。問題解決でいえば、発散のステップである。ファシリテーターは、しっかりとメッセージを受け止め、そこにこめられた意味や思いを引っ張り出していかなければならない。具体的には、傾聴、復唱、質問、主張、非言語メッセージの解読など、コミュニケーション系（右脳系・EQ系）のスキルが求められる。

構造化のスキル ~かみ合わせ、整理する~

発散が終れば収束である。論理的にもしっかりと議論をかみあわせながら、議論の全体像を整理して、論点を絞り込んでいく。図解を使いながら、議論を分かりやすい形にまとめていくのが一般的である。今度はロジカルシンキングをはじめとする、思考系（左脳系・IQ系）のスキルが求められる。加えて、図解ツールをできるだけ多く頭に入れておいて、議論に応じて自在に使い分けられなければいけない。

合意形成のスキル ~まとめて、分かち合う~

議論がある程度煮詰まってきたなら、創造的なコンセンサスに向けて意見をまとめていく。問題解決でいえば、意思決定のステップである。多くの場合には、ここで様々な対立が生まれ、簡単には意見がまとまらない。対立解消のスキルが求められ、ファシリテーターの力量が最も問われるところである。ひとたび合意ができれば、活動を振り返って個人や組織の学びを確認し、次に向けての糧としていく。

また、子ども参加におけるファシリテーターの条件としては、山本克彦は以下の15点をあげている。

ファシリテーターの条件

ファシリテーターの条件

「指導者」ではなく「支援者」

「先導者」ではなく「伴走者」であるというスタンスを持っている

ファシリテーターの条件

学習者と水平な関係にあり

主体的な参加を促すことができる

ファシリテーターの条件

その場の“雰囲気”をとらえ、それを尊重できる
(操作的にならない)

ファシリテーターの条件

その場の“状況”に対応する

柔軟性を持っている(リーダーシップスタイルを固定しない)

ファシリテーターの条件

プロセスを大切に

必要に応じてそこに介入できる

ファシリテーターの条件

学びを押し付けるのではなく

気づきを促すことができる

ファシリテーターの条件

自ら率先して自己開示ができ開放的である

ファシリテーターの条件

自己の間違いや

知らないことを認めることができる

ファシリテーターの条件

多様な価値観を

受け容れることができる

ファシリテーターの条件

表現力が豊かで

学習者への対応が明確である

ファシリテーターの条件

親しみが持て

明るい雰囲気を持っている

ファシリテーターの条件

ユーモアがある

ファシリテーターの条件

評価的な言動をとらない

ファシリテーターの条件

時間配分がうまい

ファシリテーターの条件

学習者を信頼し

「待つ」ことができる

子どもに関わる職業に従事している中で自然とこう
いったスキルが身につく場合も多いが、近年はファシリ
テーターとしての考え方を学び技術を習得するための
研修や講座等が実施され始めている。

ファシリテーターの活動

子どもの参加を促すためのファシリテーターは、現
在では子どもに関わる実に多くの場面で活動している。

子どもたちが自らに影響に及ぼす事象についての意
見を述べることができるよう、ファシリテーターがエン
パワメントし、コーディネートしている。例えば、
自治体の子どもに関する施策・計画づくりへ子どもた

ち自身が関わることで、意見を反映したものが作成・
実施される。また、子どもたち自身が企画・運営した
イベントや活動において、共に考え時には調整を行っ
たりする役割を担っていることもある。

課 題

子どもたちの「参加」促進のために、ファシリテ
ーターに求められる役割や期待は大きい。子どもたちの
意見が一方通行ではなく、反映され、何らかの形でや
り取りが可能となるようなものにしていくためにも、
ファシリテーターの役割を担うおとなが求められてい
る。

そのようなファシリテーターにおいて、人材が少な
いこと、子ども参加のファシリテーターへの研修や学
習機会が少ないこと、認知度の低さという課題がある
と桜井は述べている。

現在、いくつかの団体で子ども参加を促進するた
めのファシリテーターを養成する講座や研修会が設けら
れている。例えば西東京市では、市民向けにファシリ
テーター養成講座を開催し、子どもの権利条約にある
子ども参加の理解とその必要性について、市民が学習
する機会を設けた。

子どもの権利条約にあるように、子どもの意見を大
事にし、子どもたちの声を聞き取っていくためにも、
それをきちんと拾えるおとなの存在、ファシリテ
ーターとしての役割を持ったおとなの存在は求められて
いる。

【参考文献】

- ・ロジャー・ハート著『子どもの参画』萌文社、2000年
- ・ユニセフ『ユニセフ世界子供白書2003』
- ・子どもの権利条約総合研究所『子どもの権利研究』
- ・日本ファシリテーション協会HP

その他、西東京市で実施したファシリテーター養成講座の配
布資料を参考